

シ ョ パ ン 論 (一)

——ポーランドとシヨパン——

佐 藤 允 彦

シヨパンの音楽上の思想はバッハ、モーツアルトに対する憧憬であり、一方では彼自身の体験を経てポーランドの伝統音楽より汲みとった自由の概念であることは、前稿シヨパン論(一)で述べた通りである。この音楽上の思想は変わることはなかった。それは或る意味では個人主義的と解釈できよう。この論を進めるにあたり、もう一つの大きな問題「シヨパンとポーランド」に触れなければならない。その理由は、このテーマの中にも彼の芸術上の思想、生活上の思想にせまる重要な背景があると理解されるからである。

しかしこのテーマは余りにも大きい。この結びつきを考える時、必ずとり上げなければならない問題がたくさんあるからである。ポーランド音楽界、彼の生活に影響を与えた人々、ポーランドにおけるロマン主義運動、愛国心を受ける、何れも放置できない重要なものである。どのような人々も、その人間形成の上で家庭や社会から大きな影響を受けるといふことから判断してシヨパンの家庭や当時のポーランド社会をみながら、二、三の点に筆を進めたい。

シヨパンといえは愛国主義に満ちた音楽家であると早計に判断を下してしまう前に、もう一度その愛国心を考えな

ければならない理由はある。第一に彼が混血児であつたという立場を考えなければならぬし、必然的に外国人であつて、しかも彼に思想的に大きな影響を与えたとみられる父の思想上の立場、更に生涯の後半を外国で過したシヨパンの愛国心の形と発露など、どれも非常に意味の深い大問題ではないであらうか。

シヨパンの父ニコラス・シヨパンはフランスのローレーヌにあるマランヴィユという村に生れた。一七七一年四月十七日のことである。このことは長い間不明のままであつたが、エドヴァルド・ガンシユの研究によつて明らかにされた。生家は、はじめ車大工をしていたが、後に農業を営み葡萄の栽培をしている。彼には二人の姉妹があつた。このローレーヌの平和な田舎の男が突如としてポーランドに移住し、これを永住の地と決めてしまった原因は今もつて明らかになつていない。ニコラスが十七歳頃にフランス革命前の動揺しはじめたフランスに見切りをつけ、ポーランドに来たことに關しては、いろいろな憶測を生みロマンチックな物語りともなつてゐる。一説によれば、自分をポーランド貴族の落胤であると信じきり、真実の父を求めてポーランドに向つたのだとあるが、彼の出生の秘密が明らかになつた今、その論は全くロマンチックな物語になつてゐる。又、彼は徴兵脱れの為に脱出したのである、という説もある。この方が前者にくらべてはるかに真实性のあるものだと言えよう。しかしこの後者とて、ポーランドという土地を目指さなければならぬ必然性を持つてはいない。

彼がローレーヌからポーランドに移つた理由として、次のような点を考えてみた。ローレーヌ地方は、一時ポーランドの貴族スタニスワフに支配されてゐたことがある。中世には強大を誇つてゐたポーランドも、中世が終りを告げ近世に入る前には、その過去の華やかな歴史とは見まがうばかりに衰微してゐた。そしてその中から且つての歴史にふさわしい国家を再編しようという動きが活発にあつたが、ついに意の如くならずニコラスの生れた直後一七七二年には、ロシア、プロシア、オーストリアによる第一回の分割という悲劇を経験した。何れにしても、彼の生国ローレ

ポーランドとの関係が全くなかったのではなく、更にローレーヌ公爵つまりスタニスワフの統治は寛大なものとして、その地方で非常に評判が良いものであったといわれている。とすればニコラスが脱出を考えた時、ポーランドを第一に考えたことは、突飛なことではない。

又、十八世紀末のヨーロッパ社会は産業革命の途上であり、大きく揺れ動いていた時代であった。しかもそれについて、新しい資本主義の体制がほぼ確立された時代でもあった。後に貴族の家庭教師になったり、大学のフランス文学の教授を勤めたニコラスには、すでにこうした社会情勢を見る目があったであろうし、農業とか田舎での零細企業に従事するよりは、むしろ自分の慾望を満足する迄伸ばすことのできる絶好の国として、ポーランドを考えたことはあり得ることではないだろうか。新思想は常に若い年齢層に共感を与え、その野心の根底となり得るものである。田舎育ちにしては知性に富み、ロマン派の文学書を愛し、フリュートを素人くさくなく吹き、目先良くものを感じとる若者が、資本主義に盲目でいた筈はなく、無一文から出発することができ、自己のもつあらゆる可能性を試すことのできる舞台としてポーランドを見たことは当然ではないだろうか。その頃のポーランドは分割状態であったし、国家としての満足な形態をとっていないばかりか、プロシアやフランスの如く発達した社会を形造つてもいなかった。その国の経済は、広大な平原による普通の農業に依存し、農民が零細化する一方では豪農・貴族が豪華な生活を楽しんでフランス文化を愛し、ことごとくにフランスがその手本ようになっていた。この農民と貴族が、ポーランドの近代化を遅らせる原因になっていた。しかし近代化の波は、決してポーランドを避けたのではなく、じわじわと浸透しつつあった。三分割のためもあるが、そこにはあらゆる民族が雑居していたし、生活することができた。進歩的な考えをもち、努力さえすれば、どんな希望をも実現できる新開地であった。この頃、多くのユダヤ人が移住し、全ヨーロッパのユダヤ人口の三分の一も定住したことからみても、その社会状態を推察することができるであろう。

更にニコラスをポーランドに向けた原因として、先述のフランス文化とポーランド社会の結びつきが考えられる。上流社会はフランス色に塗りつぶされていたし、それに習って一般社会人も最も進歩した見習うべきものとして、その文化をすすんでとり入れたのである。その国にフランス人のニコラスが登場し、例え彼の野心（それが事業であるにせよ、何にせよ）が無残に破れても、その日から困ることはあるまいという安易な気持もあつたに違いない。

何れにしても、ニコラス・シヨパンはローレーヌの農場を離れて、一七八七年頃ポーランドに現われたのである。ワルシャヴァの煙草工場の事務員になつた彼に、最初の試練の時が来た。それは一七九三年第二回分割を境に工場は閉鎖され、帰国を思つた時には病気のため身動きすることもできなくなつていた。病後帰国することなく、もう一度の出発を目指して彼はポーランド最大の救国の英雄と尊敬されているコシチューシコの組織する反乱軍に参加した。外国人であるニコラスが反乱軍という特殊な組織に身を投じたことは、如何に冒險的な移住者の考えとはいへ余りにも危険が多すぎることはないだろうか。その理由がただ、再出発のための足がかりでなかつたことは当然である。元来ポーランド人は、氣力の旺盛な民族としてヨーロッパ中にその名をはせていた。その性質は北国の民族らしい強情さと、すぐ熱くなる情熱的なものが同居していた。「ポーランド人は三人寄ると革命を企てる」と、分割者達に怖れられた民族的自覚と反骨は、その中で約六年生活を共にし、彼等の思想に接したニコラスの正義感と生活力に大きく働いていたことは明らかであろう。彼は反乱軍の將校になつたが、ワルシャヴァ市のブラガ地区での乱戦の直前、軍務を離れた。だがこのブラガの戦闘はポーランド近世史上最初の血腥い受難であり、約一万人の一般市民がロシア兵の殺りくのままになつたことは、彼の思想形成の上で大きく影響したとみられる。それはフランス人とポーランド人といった民族の違い、彼等の受けた打撃に対する同情を越えて、生ける人間として反省する時に感じるヒューマニズムに根ざした正義感に強く打たれたのである。そうして、こうした歴史の現実の中に生きている彼等のぶちまける

ニヒリスティックな思想やアナキズム、無気力状態といった様々の思想的混乱を身を以て体験し理解することができたであろう。

コシチューシコの企てた独立運動も、ニコラスに人間的、思想的生長という大影響を残しながらも、ブラガでの惨劇をもってその終幕を閉じた。しかし、如何に彼が生長し、人間的自覚に満ちたとはいえ、彼がこの事件を境にポーランド人化したのだなどは決して言えない。彼は反乱後の混乱時代に、もう一度ローレーヌに帰ることを思いついた。しかし今度も彼は病に倒れ、帰国することができずに終った。病後、最も彼の健康に適し、その上安定した生活をたてることのできる落着いた仕事として、フランス語の教授を思いつき、早速ワチンスカ伯爵家の家庭教師の地位を得ることができた。そうして数年後の一八〇〇年になると、ジェラゾヴァ・ヴォーラに在るスカルベック伯爵家の家庭教師として、ワルシャヴァを離れて行った。一八〇六年、同じ伯爵家に侍女として働いていたユスチナ・クジザノフスカという夫人と結婚することになった。ユスチナは、侍女をしていたとはいえ伯爵家と遠縁になり、その家系は落ちぶれていたとはいえ、歴とした正しい貴族の血を引いた娘であった。この時に至って始めて彼はポーランドを離れることを断念し、一応ポーランド人になりきることを決意したに違いない。その上、一年後に長女ルイーザが生まれるに及び、その決意はより強いものとなった。彼はフランス人であったとはいえ、誇るべき家系もなく、著名な豪農の出でもなく、ローレーヌには何も無い残すこととでなかつた。家系の問題が上流社会では絶対的な条件であつたばかりか、無名とはいえ立派な家系をもつ娘と結婚し、上流社会に入り込んで生活するかぎり、これに對すコンプレックスは彼にとつて相当な負担となつたことはいなめない。実際、以後彼は決してフランスにいた頃の生活や家系について語つたことはなく、ガンシユの研究以前は作曲家ショパンの陰にかくれながらも、その出生は美しいロマンに飾りたてられていたのである。出生地や二人の姉妹のこと、ローレーヌの田舎の話はおろか、その後一切のフラン

スと絶縁した点からみて、彼はその結婚や長女の誕生を機会に、はじめてポーランド人になりきったとみることができ。失業による挫折も反乱の経験も、まだまだ彼をポーランド人化するには不足であったが、結婚という最も個人的な経験を経てそれがなされたことと、その父に影響されたシヨパンが後年パリで暮しながらポーランドを忘れることができずに終ったことを想い合わせると、思想遍歴の違いや経験の差を考えても興味ある問題ではないだろうか。

一八一〇年二月二十二日、スカルベック伯爵邸内にある一軒の家に、フレデリック・フランソア・シヨパンが生れた。壮年期に入りながら青年のような意気に満ち、フランスから完全に自己を隔離したニコラスを父として生れた彼は、長じて逆に二度ポーランドを忘れることができないまま、再び生国に帰ることもなく父の国にその骨をうずめる結果になる。フレデリック・シヨパンとポーランドとの関係で最も重要なことは、後に彼の創作に影響したポーランドの伝統音楽との関係である（これについては、前稿シヨパン論(一)に論じたので、再び取り上げない）。彼の出生後数カ月経つと、彼の一家はワルシャヴァ市中に移った。その場所は大学の前にあり、大通りに面した立派な家である。ニコラスは、この移転を機に、ワルシャヴァの上級予備校にフランス語の教師として職を得、続いて陸軍の軍学校のフランス語教官になるほど、着々とその地位を固めていった。そしてより深くポーランド人に接近することもできたし、社会的信用も日毎に高まったのである。フレデリックの教育は、総てこのワルシャヴァで行なわれた。シヨパン家は、上流社会の子弟を安心して任せられると認められ、たくさんの子供をあずかっていた関係上、彼の家は一種の寄宿舎のような様相を呈していた。彼等は、上流社会の趣味、作法通りに育てられたが、シヨパン家の子供達とて同様に教育された。後年パリ時代のシヨパンにみられる貴族趣味も、こうした環境の中から身につけられたものである。この家に入入りする人達は、学者、芸術家、一般人も総てワルシャヴァの一流の人達であったことも、彼にいろいろの面で影響している。ピアノのレッスンもワルシャヴァで始められ、その練習に力を入れ、天才性を発揮する一

方、作曲が生れつきの本能的要求であるかのように、自然に次々と曲を生み出し、この面でも天才児として有名になつていった。現在も残る一八一七年の作品ト短調のポロネーズ（作品番号なし）を初めとして、この頃から彼の原稿の量は増す一方であつた。このポロネーズは、ワルシャヴァの新聞に報道されたため、一躍彼の名は有名になつたが、彼の作品の一つの特徴である上声部での音の緊張に対する興味を示している点など、面白味がある。しかしまだまだヴェーヴァーの影響の方が強かつた。更に八歳になると、当時難曲だといわれたギローヴェッツの協奏曲でワルシャヴァ市民にデビューした彼は、ポーランドのモーツアルトだと騒がれ、上流社会のサロンの寵児となり、音楽への興味がますます高められることとなつた。

しかし彼の教育は、殊更に音楽を中心に組立てられたものではなく、普通の子供と同じ教育をされ、音楽は家庭におけるプログラムの中に組入れられた程度であつた。両親すら彼が音楽学校に入学するまでは、まさかフレデリックが音楽を志しているとは夢にも思つていなかったのである。このような生活のうちに、彼の自由な音楽勉強は進められていった。

ポーランドは民謡の宝庫である。それが先ず彼の心を捉えた。そして彼に決定的な意味をもつことであつた。更に民謡に対する開眼は、一八二四年のシャファルニア旅行（ワルシャヴァの西北方約一八〇程の農村）で決定的となり、この時にマズルカのスケッチをしたり農民のバンドに加わつたりして、彼自身の音楽観を築きあげたのである。それは、音楽の基本がリズムにあり、リズムと歌から音楽がなりたつという最も基礎的なことを教えられたばかりか、身をもつて体験し、経験を通じて彼の音楽思想の中に整理されていったのである。この事實は、シヨパンとポーランドの関係の中で最も重要なことなのである。

一八二八年、フレデリックは偶然の機会からベルリンに旅行することができた。今迄は話しに聞いていただけの西

歐の音楽事情を、ひしひしと感ずることができた。それ迄のシヨパンは、ワルシャヴァの市民に騒がれながらも、ワルシャヴァという、ポーランドという一つの地域の中に閉じ込められ、その他の地域のことに関しては知識こそあれ、さして鋭敏ではなかったろう。ニコラス・シヨパンの社会的地位や信用が確立されるや、彼の家は肩のこらない一種のサロンとなった。そこにはワルシャヴァで著名な学者・文人・博物学者達が何となく集まり、いろいろの話に花を咲かせていた。時にはドイツ、フランスのロマン主義作品が話題の中心になり、ヴェーヴァーやフムメル、パガニーニの超人的演奏の噂話し、オペラや演劇が主題にもなった。これらの最高の頭脳の人達の間に加わり、その話に興じることができたということも、彼の人間形成や芸術思想の発展の上で、非常に有益であったといえよう。彼の姉妹も、早くから文学的素質を現わした点からみても明らかである。ポーランドというヨーロッパの片隅にいながらにして、ヨーロッパの中心に興りつつある新しい芸術思想の詳細を知ることができた。そして「芸術における自由」を学びとって、自己の中に消化することができた。これとポーランド音楽の関係は、見逃すことのできない大きなものである。

こうした様々の話の中で、最も彼の好奇心をかきたてたものは、何よりも音楽に関するものであったことは疑いない。新しいオペラの話しも楽しかった。ポーランドのオペラ界の盛況やロッシーニの大成功から判断しても、彼のオペラに対する愛着から無意識のうちに受けた作品への影響を考える時、それは明らかである。超人パガニーニや天才児リスト、メンデルスゾーンの名前を聞くことも、彼の競争心を駆りたてたに違いない。

シヨパン家のサロンは、このように大きな影響を与えた。しかし、これ以上に彼の心に働きかけた人として、アントン・ラジヴィーウ公を挙げたい。プロシア系の貴族であるラジヴィーウ公は、シヨパンとの関係でリストの著書の中で、シヨパンの学資上のパトロンであったとされたため、つまらない誤解を受けたが、そんなことよりもシヨパン

の音楽への情熱を無意識のうちに盛りたてた陰の人ではないかとみている。彼はロシアの有力者であったばかりか、自分でも四重奏団を編成してチェロを弾いた。その上、ゲーテの「ファウスト」の劇音楽作曲した素人ばなれした音楽人であった。それよりもここで重要なことは、音楽界における顔の広さと、一流の演奏家の活動を知っている点では、ポーランドでは彼の右に出る者がなかったという点である。天才メンデルスゾーン一家とも親しく、幼いフェリックスからピアノ四重奏第一番を捧げられている。ラジヴィーウ公は、一八二五年ワルシャヴァでショパンの演奏を聞き、すっかりショパン・ファンになってしまった。一八二七・八と二年の夏の間、彼はアントニンにあるラジヴィーウ公の邸に招かれた。彼の唯一のピアノ三重奏が二八年から翌年にかけての作品であること、その作品をラジヴィーウ公に捧げたことからみても、この殿様の刺戟によって作曲する気持になったとみて妥当であろう。前記メンデルスゾーンの作品が一八二二年の作である点からみて、ショパンが滞在中にこの作品を演奏してみても、これに負けない快心の作を同じ人に捧げる気になったとみることが出来る。それよりもむしろ、天才の名をほしきままにしていたメンデルスゾーンに対する、良い意味でのチャレンジであったと言えるのではないだろうか。初期のショパンにしては珍しく時間をかけ、楽器の選定に迷い、数度の書直しの後、このトリオは生れた。

ラジヴィーウ公は、作品八だけに働いているのではない。ワルシャヴァでは噂話だった音楽家達も、この人からは聞いた者のみの話せる実感・批評となつてショパンの耳に響いた。二十八年夏のアントニン滞在が比較的長かったことをみても、如何に彼がその滞在を楽しみ期待していたかわかる。彼等の話しは、メンデルスゾーンのことはかなりではない。公と最も親しかったスポンティニーニ、ツェルター、リスト、ヴェーヴァー、フムメル等、日頃のショパンが偶像のように思っていた人々の名がとびだし、彼等の名を聞き、活動を知ることが彼の創作慾に直接響いてきた。就中、メンデルスゾーンの一連の作品、オペラ(作品十)、二つのシンフォニー(作品十一、二十一)、ピアノ四重奏

曲をはじめ弦楽四重奏曲第一、第二、嬰へ短調のピアノ独奏用キャプリス（作品五）、ソナタや幻想曲に接することは、彼の作曲欲をいやが上にもり立てた。更にリストやパガニーニ、タールベルクの評判は、創作家なるだけでなく、演奏家としても卓越したテクニックを持つべきである、という全く妥当な結論を自覚させるに充分であった。幸いにも一八一九年、フムメルとパガニーニがワルシャヴフに來演したことは、彼の結論を正しいものであると判断できる裏付けともなった。そしてこの期を境に、作品十のエチュードのうち数曲にとりかかっている。シムパンの作品表をみても、一八二七年後、急に作品数が増加していることをみても、ワルシャヴフだけでは得難い刺戟をアントニンのラジヴィーウ公から受けた為だとみるべきである。一八二七年末には、彼の名をヨーロッパに紹介したラ・チ・ダレム変奏曲（作品二）を完成し、続いてソナタ（作品四）をはじめ、次のような作品を見ることが出来る。

1827 Andante dolente B-moll

Mazurka a-moll Op. 68, Nr. 2

Nokturn c-moll

Sonata c-moll Op. 4

Polonez d-moll Op. 71, Nr. 1

Nokturn e-moll Op. 72, Nr. 1

Waltz As-dur, Es-dur

Wariacje na temat z opery "Don Juan" Op. 2

1828 Rondo C-dur na 2 fortepiany. Op. 73

Polonez B-dur Op. 71, Nr. 2

Fantazja A-dur na tematy polskich pies'ni ludowych na fortep. i orkiestre, Op. 13

Rondo à la Krakowiak na fortep. i orkiestre Op. 14

Mazurek D-dur

Etude Op. 10, Nr.?

1829 "Souvenir de Paganini"

Wariacj E-dur na fletifortep. na tematy z "Kopciuszka" Rossiniego.

Polonez Ges-dur

Trio g-moll na fortep., skrzypce i wiol. Op. 8

Pies'ni "Zycienie" "Gdzie lubi" Op. 74, Nr. 1 i Nr. 5

Marsz zalobny c-moll. Op. 72, Nr. 2

Polonez f-moll Op. 71, Nr. 3

Piano Koncerto f-moll Op. 21

Mazurek G-dur

Walce Des-dur Op. 70, Nr. 3

Mazurek D-dur

Walce E-dur

Walce h-moll Op. 69, Nr. 2

Mazurek C-dur Op. 68, Nr. 1

Mazurek F-dur Op. 68, Nr. 3

Introdukcyj i Polonez C-dur na fortep. i Cello. Op. 3

ラジヴィーウ公を通じて知られるヨーロッパ楽界の様相は驚異的であり、「ポーランドのモーツァルト」などという、彼にしてみればおこがましい名前に安閑としていられないばかりか、一層彼を音楽家としての自覚に導くという建設的結果に現われた。彼と比肩できる音楽家となるのが彼の至上の目的となり、先のウイン旅行で得た自信も発火点となって、野心と気概にみちてウインに登場することを願うようになった。こうしてみると、それだけの裏付けを与えたラジヴィーウ公の目に見えない役割も、相当重要なものだと言うことができる。

「ポーランドとシヨパン」、ここで彼の愛国心の問題が抬頭してくる。彼がポーランドにいた頃、その国の独立・再建に頭を痛めた人々は、貴族・豪農でもなく、ポーランドの歴史と現実と憂慮する若い人達であった。勿論、その話題はシヨパン家のサロンでもあったが、学生達はもつと積極的に働き、或る者は地下組織に参加していった。シヨパンがポーランドを離れた一カ月後、一八三〇年一月二九日、それは反ロシア暴動という形をとって現われた。ワルシャヴァに彼がいる間、一触即発の危機を察することができたに違いないが、これらの動きに彼がなんらかの動揺や反応を示したという記録はない。勿論、このような革命の準備段階に触れることは、多くの危険を伴うものであった。ウインに滞在中、暴動の報を受けた彼は、親友のテュティス・ヴォイチェホウスキと一緒に帰国する決心をしたが、彼になだめられ結局一人ウインに残留した。その胸中は革命に参加したい欲望や、温室育ちの彼が一人ウインに放置される心細さ、そうしたいいろいろの感情が渦巻いていた。彼にとっては以前に一度来て大成功したウインにいるということ、外国とはいえ少数の知人がいることも、この際の慰めになったことであろう。そのうちに「ポーランドの革命に参加するより、音楽家として大成するように」という父の手紙が舞込み、ようやく心中の整理をして落着きをとりもどすことができた。その手紙は、ただ、「ポーランド人という一民族的立場に捉われることなく、むしろ国際人的人間・音楽家に成長するように」というニコラスの、あの数奇な人生経験から生れた当然の結論であり、子供

に与えることのできる最良の進言であった。

ウインは、彼に対して甘くはなかつた。失意した彼がパリに向う途中、シュトゥットガルトに滞在している時、ワルシャヴァの街が陥落したという悲報を受けとつた。その報せたるや、ワルシャヴァが完全にロシア人のなすがまゝになり、街中が彼等の殺りくの渦中にあるかのような誇大なものであつた為、両親姉妹の安否を氣遣つた不安のために、彼は精神錯乱の状態になつていた。その時期に、スケルトオ一番の完全な草稿ができたことと思ひ合わせる、非常に興味あることだ。この時彼の心の大部分を占めた考えは、暴動の失敗ということだつたかも知れない。しかし、生きる人間として追いつめられた最後の脳裡に浮ぶもの、それはショパン家の家族の安全を祈る氣持であつたろうことは当然である。そして心配は、彼の家族だけに止らず親しい友人に及び、果には父から聞いたプラガの戦鬪と同じように血塗られワルシャヴァ市民へと、發展していった。且ての父ニコラスのように、彼は旅行の途上で、しかも同邦の人達に対する同情とロシアに対する烈しい怒りに、自分自身が自撃し援助できないジレンマの感情的混乱の中で、苦悩に身をさらさなければならなかつた。この感情の整理ができなければ、彼は生きることすらできなかつたろう。そこには、も早ショパン家だけがあつたのではない。ポーランド人・ポーランド国というよりは人間という立場を改めて考えなければならなかつた。そして、その一方は現世に対する不信となつて彼の心に浸み込んでいった。やがてこの報が過大なものであり、彼の家族も皆無事であることがわかり、やっと落着きを取戻したが、思想的成長期にあつた彼が受けたこの試練は、少々荷が重すぎたきらいもある。彼なりに感じとつた愛国心は、決して後にシューマンの述べている「花の陰なる大砲群」などという形式ぶつたものではなく、「愛国心」という言葉には限定されない、もっと広いヒューマニズムにあつたとみるのが妥当であらう（一部の研究者達の言うように、彼はそれ故にマズルカを書いた——などとみるのは、うがりすぎだと言つてよい）。愛国心を云々するにも、当時のポーランドに

は国家らしい形態すらなかった。ポーランド人に対する彼の心情は、民族そのものと解釈すべきである。同じ言葉を話し、音楽を楽しみ、彼等だけに通用するユーモアに満ちたポーランド民族に対する同情と畏敬の念である。そうした自覚があればこそ、彼は自分がポーランド人であることに誇りを感じていたのである。

父ニコラスが、あっさりとフランスを亡却してしまったのに反し、フレデリックの周囲には必ずポーランドがあった。彼はポーランドを亡却するどころか、片時ともそれを離すことができなかったのである。彼の苦悩の中に見出した民族愛の精神が、彼にそうさせたのであろう。それは余りにもエゴイストチックなものであったかも知れない。しかし、パトリオチズムといったことよりも更に深い人間的結論だと言えないだろうか。祖国の独立、革命の成功といった国家的大理想ではなく（勿論、それは願わしいことだ）、彼の生れ、成長したポーランドに対する思慕の結末であり、彼はそれを再現することを求めたのである。その意味では余りにも消極的な思想的結末とみられるかも知れないが、外国で、しかも一種の亡命者として感じられる最も強いヒューマニズムの発露である。

民族愛（愛国主義ではない）が、彼の思想的背景の一つである。シヨパンは、終世ポーランド人であることを誇りにしていた。シヨパンのこうした思想的遍歴をたどる時、父ニコラスと全く違った思想上の結末を見せられる。ニコラスは、人間の哀しさ、弱さを見せつけられ、最も個人主義的な方向、家族主義の中に安らぎを見出したのであったが、フレデリックは、ヨーロッパではユダヤ人について嫌われるポーランド人であることに誇りを持って生き抜いた。その民族愛の精神は、悲劇的歴史を背負ったポーランド民族に止ることなく、全人類に通じるところに、彼の人生観の一端、思想的立場が見られる。そこにも、彼のロマン主義思想の要素がうかがえる。